様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　１ 日現在

機関番号：１２１０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｋ１１４１５

研究課題名（和文）チームスポーツにおける競技力の形成と向上を支える仕組みの究明

研究課題名（英文）Investigation of the mechanism that supports the formation and improvement of the athletic capability in team sports

研究代表者
内山　治樹（UCHIYAMA, HARUKI）

筑波大学・体育系・教授

研究者番号：００１６８７１７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，チームスポーツの「競技力」を把握するのに相応しい枠組みが検討された．考察の結果，「勝利」を目標とする実践過程が作動し継続していく中で，「身体諸能力の顕現化」を目標とするもう一つの実践過程と密接に連動する「二重作動」という仕組みにおいて，体験知や経験知といった「実践知」への埋没を峻拒し，あくまでも他者への説明性と伝承性そして普遍妥当性を有する「理論知」の行使に徹することが肝要である，と結論づけられた．

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の成果は，チームスポーツにおける競技力の形成と向上に直結するコーチングの効力に肯定的に影響を及ぼす観察できない内容を明らかにしたり説明したりする可能性を提供するものである．それはまた，理論化という営為を地道に重ねていけば，まさに「開かれた知」として集積されて他の学問分野との交流を呼び込み，当然のことながら，実践への貢献も十分果たし得ることになると言える．

研究成果の概要（英文）：This study was examined a framework suitable for grasping the "athletic capability" in team sports. As a result of consideration, while the practical process aiming at " victory" operates and continues, another practical process aiming at "manifestation of various physical abilities" is closely linked with "double action". In the above, it is essential to reject the immersion in "practical knowledge" such as experiential knowledge and empirical knowledge, and to devote ourselves to the exercise of "theoretical knowledge" that has the ability to be explained to others, the ability to be handed down, and universal validity.

研究分野：コーチング科学

キーワード：チームスポーツ　競技力　コーチング

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）チームスポーツにおける競技力の形成と向上にとって，スポーツ・コーチング（以下，コーチング）の果たす役割が重要であることは誰もが認めるであろう．その一方で，伝統的なコーチング研究は，圧倒的に量的な方法を用いることで，コーチのその場その場の行為の記述や，観察可能なコーチング行為と諸要素の分析に終始している．そのような方法は伝統的な科学的方法からもたらされる仮説を確認しているものの（Hodgson et al., 2017），コーチングという観察不可能な現象を支える根本原理を扱うことに失敗している．

現在のコーチング研究において，これまでなぜ研究者たちは理論的に基礎づけられたチームスポーツにおける競技力の形成と向上に係るモデルを提示できないでいるのか．それは，コーチングにかかわる一連の諸概念の定義が分かりにくく，すべてを包含したモデルを形成することなど不可能な企てであると考えられていたからである（Cushion, 2009）．また，「コーチング」という認識形式は，これまで研究者あるいはコーチが自分の意識の内部に有する共示をもとに生み出したという点において，「心的」な形式であったからである．

しかし，意味の発生から認識主体の制度化への移行が成立する上で，各人が抱く「理念」は或る一定の客観性を獲得する必要がある．つまり，各人の内部で生まれた共示は主観的な枠組みを超えて「どのような人」にとってもアクセス可能な対象とならなければならない．とすると，チームの競技力の形成と向上に寄与するコーチングも，認識形式として或る一定の制度となるためには，「人為的事物・事象の構成を規定する法則」（Cassirer, 2001）であるその「形式」が客観性を有する「理念」のもと，「超時間的で，すべてのものに，またすべての時代にアクセスすることができる」（Merleau-Ponty, 2005）という前提に基づく何等かの「仕組み」として明示されなければならない．

（２）一方で，一般に「コーチング」は「競技者をコーチが勝利の実現に向けて先導すること」（内山，2013）と定義づけられる．また，コーチが競技者を「先導する」道程は，従前の先行研究では「プロセス」と解され，「コーチング・プロセス」という術語のもとに汎用されている（Cushion, 2001; Kidman and Hnrahan, 2010; Lyle, 1999, 2002; 内山,2013）．しかし，この「プロセス」も，実践上のあらゆる事象に対して普遍性を有する形式と言語を媒介にした「理念」あるいは認識行為の「総前提」（フッサール，2003）として機能し，後続する探究者の可能性を切り拓く原動力である「学問性」が担保されていなければ，コーチングの「質」の充実・向上は画餅に帰してしまうのである．

「学問性が共有されている」と見做されるには，「メカニズムの説明と現象の生成は別物」（諏訪, 2016）であるからこそ，「どうなっているのか」を記述するのではなく，「なぜそうなっているのか」が説明できなければならない．また，或る学問の特徴を見抜き見極めるのに役立つのは雑多な末梢的博識ではなく共有可能な伝達できる知識であり，「基本的業績が支持者，後継者たちに解くべきさまざまな種類の問題の発展を約束する出発点」（中山，2013）と定義づけられる「パラダイム」としても機能しなければならない．したがって，「コーチング」に関する認識形式が或る一定のパラダイムへと収斂され得る学問性を検討することは，「競技力の形成と向上」にとって重要な意味を持つことになる．

２．研究の目的

（１）まず，原理的な問題への還帰は依然として常に新たに着手されるべき課題の１つであると

の前提から,「ヒトの身体面からの人間化」を普遍的な目標とする「体育」に内在する 2 つの実践過程に着目して，チームスポーツにおける競技力の形成と向上に直接する実践過程の仕組みを検討した.

（２）次に, 競技力の形成と向上に直接するコーチングが学問の対象足り得る所以を今一度確認することはチームスポーツにとっても必要不可欠な作業である, という前提のもと, コーチングが科学として存立する，その学問性とは何か，という重要な課題を,「学問の方法論的省察の根本形態」である「対象規定」「学問構成の原理」「研究方法論」（戸坂，1966）という３つの観点から考察した.

３．研究の方法

客観性を有する理念やパラダイムの剔抉にかかわる文献に加え, 日･独･米のチームスポーツ, 競技スポーツ, 競技力, コーチングに言及している文献を改めて収集し, それらの精読を通じて,（１）チームスポーツにおける競技力の形成と向上にかかわる仕組みを抽出し,（２）競技力の形成と向上にかかわって，競技者の集合体としてのチームが「馴致」と「超脱」を繰り返すことで弁証法的発展をする，というそのプロセスを，コーチング科学の学問性，という観点からそれぞれ分類・整理・考察することで概念化ないし定式化を図ることとした.

４．研究成果

本研究の成果は，以下の３点にまとめられる.

（１）競技力の形成と向上に密接にかかわる「コーチング」は,「競技者をコーチが勝利の実現に向けて先導すること」（内山，2013，p.683）と規定されるが，そのつど的なコーチという存在者といつでも的なコーチという存在とを区分し, 存在を主題として際立たせることで, 存在者を超越して存在者の存在へと向かう, という分析枠組みが採用されねばならない. この枠組みを採ることではじめて, コーチという概念の不変的意味が明示され, コーチという存在の普遍的規定に依拠したコーチングのア・プリオリな共通認識が可能になるからである.

このような前提のもと，チームスポーツにおける競技力の形成と向上を生じせしめるコーチングについて，①コーチの根源的役割，②競技者の原初的存在状況，③媒体としての運動文化の機能という３点から，コーチングの仕組みについて分析を行った．その結果，「コーチング」が対象とする現象ないし実践は，「運動文化→身体能力→運動文化'」という過程とそれとは目標の異なる「身体能力→運動文化→身体能力'」という過程とが密接に連動する「二重作動 double operation」というメカニズムを内包していることが明らかとなった（図１）．つまり，前者のそれ（＜A＞）は，それぞれの運動文化の特異性に競技者あるいはその集合体であるチームを馴致せしめた上でそこからの超脱を競技者やチームに継起的に促していく一方で，そのプロセスは競技者自身の身体能力を媒介とすることで維持されることが, 別言すると, 連続的で継起的なその接続は「可能的身体性」を本質とする身体能力の驚愕すべき発展・向上を生成せしめるプロセスが作動して初めて可能になる，と結論づけられた.

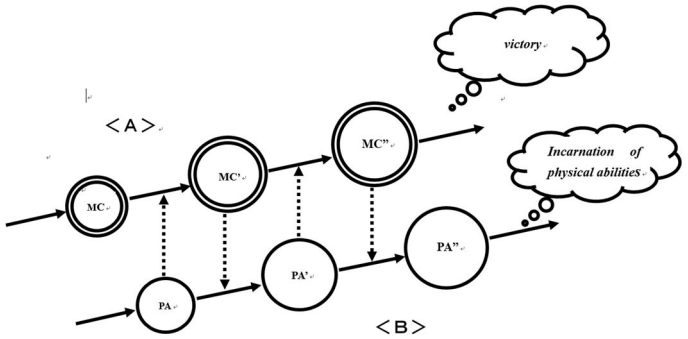

Figure 1. Double operation of practical processes in physical education
(A: specialized physical education, B: generalied physical education,
MC: movement culture, PA: physical abilities)

（２）前述した図１での「運動文化→身体能力→運動文化'」という＜A＞の実践過程において，そのめざすところは，チームの競技力を形成・向上させて，それをゲームで効果的に発揮して勝利する，ということである．それゆえ，その普遍的な目標を達成・実現するには，図１における「運動文化→運動文化 ' 」の実線（⟶）を右肩上がりへと至らしめる「身体諸能力」の破線（- - ▶ ）の介在の仕方，つまり，馴致と超脱を繰り返して競技力の形成と向上を継続的に促進していくにはどの「身体能力」をどのようにどう組み合わせてどれくらいの頻度で投入すればよいか、という創意工夫や研究開発という知的なアプローチに伏在する原理や法則性を解明したり発見したりすることが不可欠である. しかし, そこには何某かの根拠が存在しなければならず, また，その根拠は「知識の集成」である「学問」によってもたらされねばならない．つまり,「知識」は, 現実を把握するための概念装置と捉えられる「理論」を駆使して現実に接近するのが「学問」ということになるであろうし，広く解釈するなら，それは「科学」と同義でもある．

一方で，そこでの「理論を駆使して」とは，次のような「知」の形態を前提としているといえる．それはすなわち，前述したように,「外部からの解釈」という主観の働きによって経験的事実を客観的に把握しようとする,「再現可能性」と「測定可能性」を併呑する「理論知」である．なぜなら,「体験的現象という主観的現象における『内部からの解釈』」（西部, 2002）からもたらされる「知」は，その個人に固有のものであるとともに，本質的に「私秘性」を帯びているからである．しかし，運動文化を運動文化'へとか，身体能力を身体能力'へと発展的に変容（レベルアップ）させるというのは，当然のことながら「未知への挑戦」ということであって，それゆえ, 体験知や経験知ないし実践知に頼る限り, 実践者を誰も到達したことのない地平へと導いていくことは，原理上，不可能である．したがって,「コーチ本来の役割を果たすためには，個人的次元に留まっている『体験知』に依るのではなく，客観的に検証された理論によって，出来事の合理的説明あるいは将来の予測可能性を持つ『理論知』の援用が必要不可欠の条件になってくる」（内山, 2013, p. 689）のである．このような理解からすると，競技力の形成と向上の仕組みは，現実（スポーツ現象）に接近して，理論を駆使して競技者やチームの競技力やそのための媒体である身体能力の形成・向上にも寄与することにもなる．

科学的であるためには, 相互主観的に理論知を確認できる方法論によって, 印象や直観をできるだけ排除し，可能な限り客観的に現実を捉えようとすることで（普遍妥当性），他者と共有できること（説明性，伝承性）が基本である．この意味で，本研究の成果は，まさに「感覚・知覚」から「理性・思惟」による「認識」へというパラダイム転換のもと,「批判力」と「構想力」の獲得を支える「理論知」の「実践上の指針」としての役割を実証し，チームスポーツに固有の「競

技力の形成と向上」の仕組みにかかわる「知」への科学的アプローチによる実践への貢献が示されたと言える．

（３）先述した「特殊性への馴致」と「更なる高度化を目指した現状からの超脱」という体育過程における 2 つの様態において，「特殊性への馴致」を上述した「目的」として捉えると，それは実現すべき実体的対象である「勝利」という目標設定の在り方に影響を及ぼす条件に成り得る．このような「目的」と「目標」との関係を別の視点からみてみると，「チームが団結すること team cohesion」は「コーチが直面する最も緊急且つ重要な問題」（Silva，1984）であり，その解決は看過できない目標に成り得る．また，その「団結」は，チームスポーツに固有の競技者という部分とチームという全体や，チームが採る「協働行為」（内山, 2019; 2022）の内実を吟味する上で必要不可欠な考察対象でもある．

この事態について，「組織コミットメント」と「チームワーク」という２つの観点から本研究の目的に関連した補足的な研究を行った．「ある特定の組織に対する個人の同一化および関与の強さ」（Porter et al., 1974）と定義される前者では，「共通の目標を持ち，その目標の達成に向かって周囲を動かす」スタイルのビジョンリーダーシップを発揮し，「メンバーと同じ視点に立ち信頼を得ることで，友好的な関係を保つ」スタイルの仲良しリーダーシップを発揮することがメンバーの組織への貢献意欲を高めることにつながることが示唆された（仲澤ほか, 2021; 2022）．後者は，「チームワークを効果的なものにするメカニズムの１つ」（Salas et al., 2005）である「共有メンタルモデル」の共有度とスポーツにおけるチームワークの状態をそれぞれ確認できる数量的尺度を通して，チームスポーツであるバスケットボールのチームパフォーマンス発揮のための新たな介入システムを開発し，上記「協働行為」に係る共通認識獲得に相応しいツールの導出を行った（牛来ほか, 2022; 2023）．

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　8件）

１．著者名 仲澤翔大・内山治樹・吉田健司	４．巻 7
２．論文標題 大学バスケットボール部員の組織コミットメントに関する研究～指導者のリーダーシップ・スタイルに着目して～	５．発行年 2021年
３．雑誌名 バスケットボール研究	６．最初と最後の頁 77～87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 仲澤翔大・吉田健司・内山治樹	４．巻 35
２．論文標題 コーチングにおける勢力資源と組織コミットメントの関係～大学バスケットボールに着目して～	５．発行年 2022年
３．雑誌名 コーチング学研究	６．最初と最後の頁 201～212
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24776/jcoaching.35.2_201	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Uchiyama Haruki	４．巻 44
２．論文標題 Inquiry of the concept and mechanism related to idea of sports coaching: Focusing on two practical processes inherent in “physical education.”	５．発行年 2021年
３．雑誌名 The bulletin of Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba	６．最初と最後の頁 23-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Uchiyama Haruki	４．巻 20
２．論文標題 Exploring the Guiding Principles of Collaborative Acts in Team Sports. (Secondary Publication)	５．発行年 2021年
３．雑誌名 International Journal of Sport and Health Science	６．最初と最後の頁 A11-A15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 内山治樹	4．巻 46
2．論文標題 コーチング科学の学問性についての省察	5．発行年 2023年
3．雑誌名 筑波大学体育系紀要	6．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 牛来千穂子・水落文夫・内山治樹	4．巻 67
2．論文標題 スポーツ版チームワーク測定尺度の開発	5．発行年 2022年
3．雑誌名 体育学研究	6．最初と最後の頁 961-981
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5432/jjpehss.22045	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 牛来千穂子・水落文夫・内山治樹	4．巻 36(2)
2．論文標題 バスケットボール版共有メンタルモデル尺度の開発	5．発行年 2023年
3．雑誌名 コーチング学研究	6．最初と最後の頁 177-188
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24776/jcoaching.36.2_177	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 牛来千穂子・水落文夫・内山治樹
2．発表標題 球技スポーツにおけるチームワーク測定尺度の開発
3．学会等名 日本スポーツ心理学会第48回学会大会
4．発表年 2021年

１．発表者名 Ikeda, E., Uchiyama, H., Ikeda, M. and Yonekawa, N.
２．発表標題 “Causal Relationship between Collective efficacy, Cohesion and Coaching in Basketball Teams.”
３．学会等名 The 2020 Yokohama Sport Conference（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 安田拓・内山治樹
２．発表標題 バスケットボール競技における得点獲得へと向かうプレイの「流れ」についての一考察－ボール所有権獲得前後の「時間」と「空間」を視点として－
３．学会等名 日本バスケットボール学会第７回学会大会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関